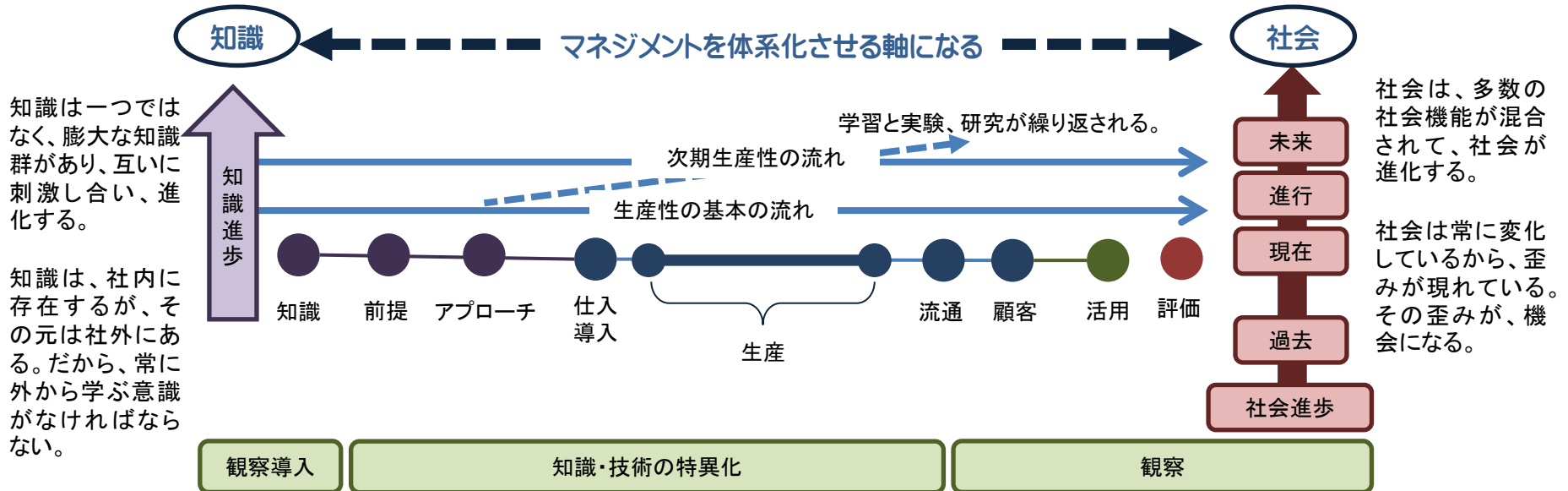


体系化されるマネジメント

生産性は、知識の活用から、生産を経て、顧客に購入され、顧客に有効に活用され、評価までを言う。

持ちえる知識・技術の特異化し、成果をあげ続けるために、マネジメントは体系化されなければならない。体系化するために、帰着する軸を必要とする。マネジメントの軸は生産性であり、自らの知識と経験を軸に帰着させる。その工程で、マネジメントが実行を伴う知識となって体系化されていく。



社会に存在する多数の知識と、社会変化と社会の歪を両軸に置いた生産性を念頭におく。仕事をするときのすべての思考と行動は、生産性に帰着する。知識、社会は変化するから、最適な生産性を実現しようとするれば、生産性の組み合わせは変化せざるを得ない。そこに、学習と実験、挑戦が必然になる。事業が変革にコミットしなければならない所以である。

マネジメントは人に関わる知識である。組織に、人に成果を上げさせる知識である。何よりも、マネジメントは人に関わる機能である。自らが求められる仕事の意味を、生産性を軸にして突き詰める。自社の社会での機能を、自社の特異をもって行うときの生産性を考える。

あらゆる行動が、生産性を軸にしたマネジメントの体系から規定されているはずである。

体系化されたマネジメントは、常に事業の見直しを要求する。商品の転換を要求する。組織内の諸々の制度、方法、技術の改善を要求する。

知識、技術が進めば、社会や知識が進めば、陳腐化するものが現れる。陳腐するものを体系的に廃棄しなければならない。

変化に対する挑戦は日常であるはずだ。体系化されたマネジメントは、見直しと、改善、廃棄と挑戦を要求している。

